

配置設計の多様化

団地の配置設計は、多くの試みが全国でなされていた。

大規模な団地の配置設計を行うにあたり、ある設計者は人の暮らしや物理的性能を解析的にとらえ、

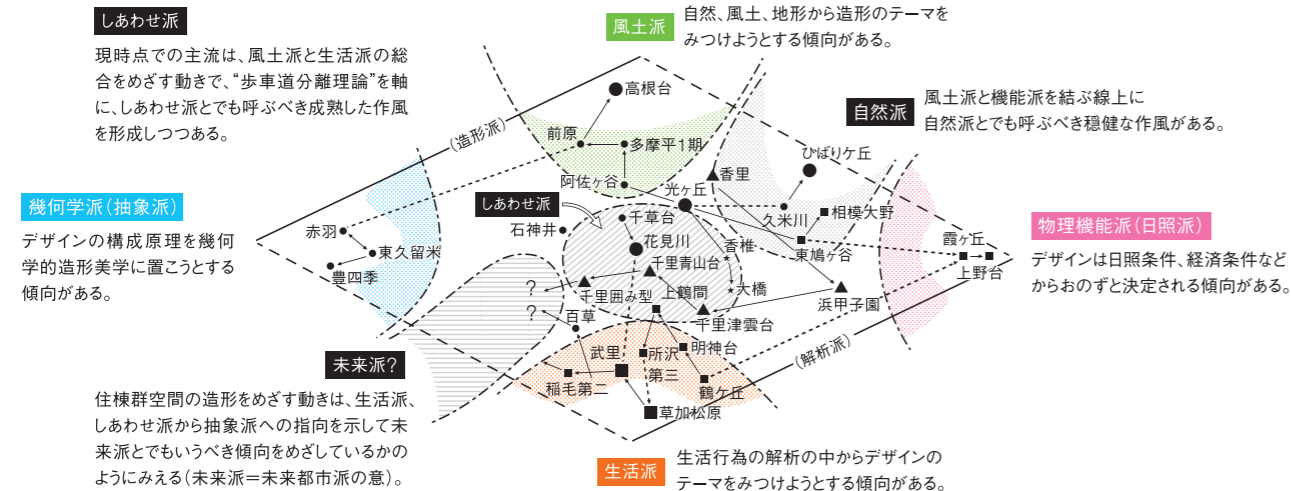
また、ある設計者は地形、風土に着目し造形的に住棟配置を行った。

結果として公団の団地には多様な住棟配置が提案された。

配置設計の流派

各団地で提案された多様な配置計画は、昭和40年代初期に第8代本社設計課長であった杉浦進氏により、それらの配置設計に

おける考え方やよりどころになったテーマ、目指した性能等により類型化され、流派として整理された。



団地設計の類型化(杉浦進氏)

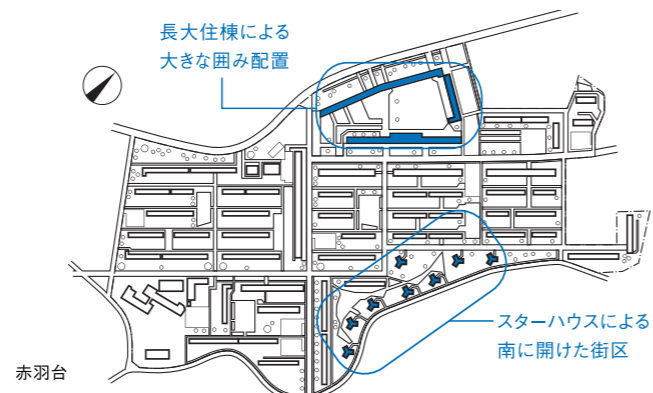
風土派

自然、風土、地形から造形のテーマを見つげようとしている。代表として多摩平、高根台、阿佐ヶ谷、前原といった団地が挙げられている。高根台団地では、谷に沿ってボックス住棟を並べ、地形の高低のうねりを示し、台地部分にはテラスハウスを配置している。地区を貫くバス道路沿いは板状住棟を並べ、街路のS字の湾曲を明確にしている。



幾何学派

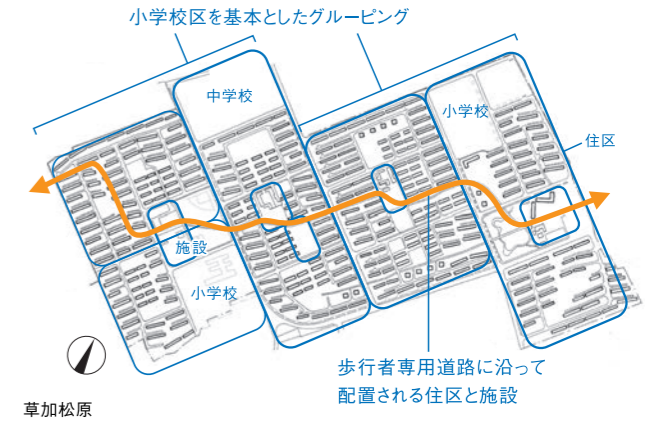
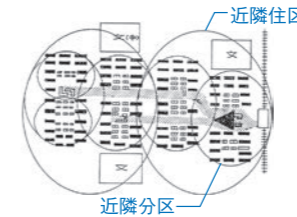
配置の構成原理を幾何学的要素に置いている。赤羽台、豊四季、東久留米が挙げられ、主要な道路を軸線として直線的に表現し、幾何学的に住棟配置をしている。赤羽台団地では、団地の軸線を直行させた中央の街区と、スターハウスを配置し南側に大きく開けていく南街区、長大住棟による大きな囲みで構成された北街区など、いろいろな特徴を持った空間構成となっている。



生活派

生活行為の解析の中から配置のテーマを見つけている。近隣住区のグルーピングや段階的に構成した施設配置をベースに、配置設計を行っている。代表例として草加松原、武里が挙げられている。

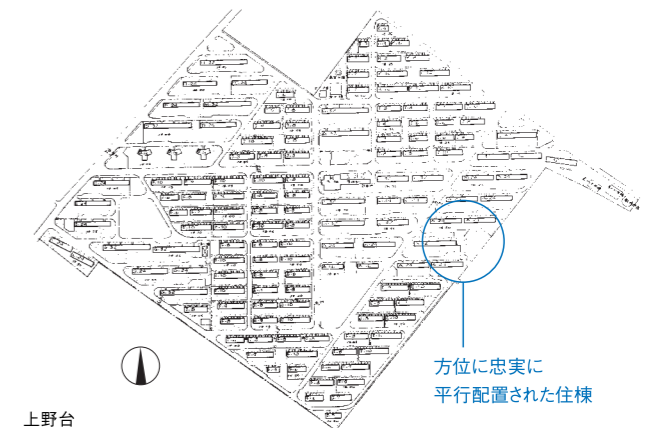
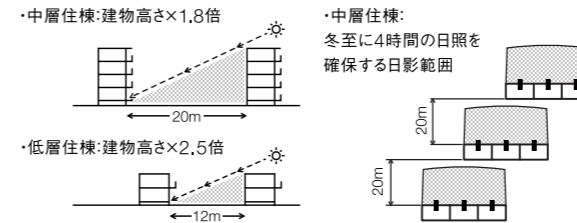
草加松原団地、近隣住区を基本とした配置の概念図
小学校区を単位とした住区や施設の配置が団地の骨格となる軸線によって理論的に配置している。



物理機能派(日照派)

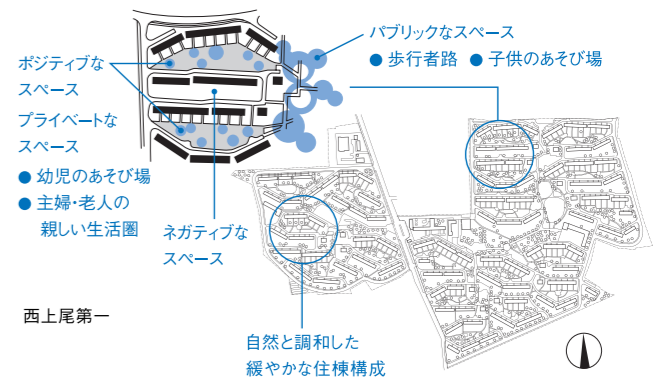
日照条件など物理的、機能的要素を中心として配置設計を行っている。霞ヶ丘、上野台などが挙げられ、日照性能重視から徹底した南面並行配置となっている。その後、騒音の遮蔽を目的とした住棟配置なども試みられており、これらも物理機能から配置を導き出したケースといえる。

冬至における日照時間確保のための隣棟間隔



自然派

風土派と物理機能派の線上にある穏やかな作風と解説されている。香里、ひばりが丘、久米川といった団地が挙げられている。いずれも郊外の自然を取り込んだ団地である。その後、既存林を活かした配置手法が数多く、その代表例である西上尾第一団地では、既存の雑木林を活かしながら緩やかな囲みによるグルーピングを形成している。



しあわせ派

風土派と生活派の総合を目指す主流の考え方、歩車分離を軸とした成熟した作風と解説されている。立地環境と生活分析をふまえたバランスのとれた配置となっている。花見川、千草台、香椎、大橋、千里青山台、千里津雲台などが代表事例として挙げられている。千里青山台団地では、東西で20mの高低差があるスロープ状の敷地において、ボックス住棟や接地階をピロティとした住棟の採用により従前地形を活かした豊かな丘陵景観を創出している。

